



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語沙流方言の助動詞「a」の用法について：中国語の「過」から見たタクシス機能
Author(s)	馬, 長城
Citation	北方人文研究, 14, 71-84
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80895
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_06_Ma.pdf



アイヌ語沙流方言の助動詞「a」の用法について¹⁾ —中国語の「過」から見たタクシス機能—

馬 長城

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

キーワード：アイヌ語の「a」 中国語の「過」 テキスト タクシス機能 継起性

1. はじめに

アイヌ語の助動詞「a」は主に文のレベルにおける現象に基づいて、「過去・完了」を表現するアスペクト助動詞として説明されてきた(金田一 1931、知里 1974 [1936]、佐藤 2008 など)。文レベルのアスペクト形式がテキストレベルにおいてタクシス(taxis)機能を果たすという事実はすでに日本語の研究や中国語の研究でも明らかになっているが²⁾、アイヌ語に関する諸研究においては、管見の限りでは、示唆されたことはあるが、詳細に関する研究はまだなされていないと言ってよいと思われる。本稿は文レベルを超えて、テキストレベルで中国語の「過³⁾」の視点から、アイヌ語の「a」のタクシス機能⁴⁾の解明を試みるものである。

アイヌ語の現地調査は話者の減少により、現在極めて困難な状況になっている。故に、本稿で使用するアイヌ語のデータは筆者が自ら調査したものではなく、すべて公開されているものである。基本的に本稿で使用するアイヌ語のデータは早稲田大学語学教育研究所、『アイヌ語音声資料 1-12』(田村 1984-2000)に限定した(沙流方言)が、適宜他の沙流方言資料のデータも参考にしてある。なお、『アイヌ語音声資料 1-12』の中にはいくつかの異なるジャンルのテキストが含まれているので、その点については以下、必要に応じて言及することにする。また、言語的に沙流方言に近いとされる千歳方言の研究成果も注意しつつ考察に利用する。

2. 先行研究

2.1 田村(1997a)と佐藤(2006)の示唆的な記述

「a」のタクシス機能はすでに田村(1997a)と佐藤(2006)によって示唆されていると思われる。まず、沙流方言の記述の中で、「a」に関して田村(1997a)は以下のように述べている。

1) 本稿は2020年度第1回言語学・日本語学研究会(北海道大学)における口頭発表に修正を加えたものである。研究会当日、参加者の方々より貴重なご指摘をいただきました。また、本稿査読者の方々からも重要なご指摘をいただきました。ここで感謝の意を表わします。

2) 日本語のタクシスに関して工藤(1995)、中国語のタクシスに関して劉(2006)にご参照されたい。

3) 文の中で見やすくするため、例文の場合を除き、簡体字である中国語の「过」をすべて日本語漢字の「過」で表わす。なお、この「過」はtonelessのものである。

4) 「a」のタクシス機能は筆者が北海道大学大学院佐藤知己先生のご提示によって考えたものである。

ア) a—今、問題にされている時よりも以前に起こったことを表す「～した」。現在からみて実際には過去のできごとだけではなく、それ以後のできごととも問題にされているときに、この助動詞は用いられる。

ku-mimaki ani kapu ku-kar wa k-e a wa.

(私の) 歯 で 皮を むい て たべ た よ

(りんごの皮をむくために包丁を持って行って渡そうとしたら、こう言った。もう食べてしまったから包丁はいらない、という気持ち。

a-kor a seta ne noyne an.

私たちが持っていた犬であるらしい

「前に飼っていた犬…」

(田村 1997a : 35)

この記述からすると、「a」が過去を表わすことは間違いない。しかし、「それ以後のできごととも問題にされているときに」という記述から、「a」はやはり、前後にある二つの出来事の間に何かの役割を果たすと解釈できるだろう。この出来事の間の関連性を表す機能を、テキストレベルにおける、ある種の結束性⁵⁾として理解すれば、ここでの「a」の説明はタクシス機能を含んでいるのではないかと考えられる。

また、沙流方言と近い方言とされる千歳方言の研究において、佐藤(2006)は「a」について下記のように述べている。

a は明白に過去に属する事実に対しても用いられる。例：k-onaha tapkar siri ku-nukar a wa
「父が踏舞するのを私は見たよ。」他方、文法的な観点から言えば、a は平叙文を終止することがなく、接続助詞、名詞句、あるいは終助詞 wa が後続するのが一般的である。このことは、a を含む構造が文の階層構造から言って中間段階に属することを示すものと考えられる。

(佐藤 2006 : 64)

この記述では「a」が平叙文を終止することがないとしている。この事実は筆者による『アイヌ語音声資料1-12』における検証とも一致している。また、接続助詞と名詞句が「a」に後続するとされていることから、「a」は複文において従属節の後部か、修飾節に位置することがわかる。「a」を含む構造が文の一部をなす中間段階に属するという事実、に、「a」の文レベルにおけるアスペクト機能を合わせて考えると、複数の文で構成するテキストでは、「a」が文と文の間の繋がりを示す機能を担っているのではないかと推測される。その繋がりに関しては、下記の佐藤(2008)の記述も参考になる。

一般に従属節の時制は主節に頼る傾向が強いけれども、アイヌ語では主節にも時制がないので、a にはそのような場合に主節との時間的な関係を明確にするという機能があるかもしれない。

佐藤 (2008 : 188)

沙流方言と千歳方言において、上記の「a」に関する示唆的な記述から、「a」はテキストレベルに

5) この用語はここで語用論における「結束性」のことではなく、繋がりという意味で用いている。

においては、文相互の時間的な関係を明確にする機能、すなわちタクシス機能を果たしている可能性があるとすることは十分可能であろう。

2.2 テキスト

本稿で使うテキストと言う用語は英語の Text の訳語である⁶⁾。テキストとは「意味的にまとまりをなす文(連続)」のことであり、話し言葉におけるものも書き言葉におけるものもそれに含まれる。また、テキストは多くの場合 2 文以上から構成される (Halliday & Hasan (1976: 1))。テキストは一般的に書き言葉を指すことが多く、談話という用語は話し言葉を指すことが多いが、そうになると書き言葉を持たないアイヌ語に対してテキストという用語を用いることは慣用に反するが、ここでは工藤 (1995: 19) に従い、一括してテキストと呼び、アイヌ語のデータにもテキストという用語を適用することにする。

2.3 タクシス機能

工藤 (1995: 21) はテキストの時間構造の問題を扱ったとき、タクシスを「一つの出来事と他の出来事との外的時間関係」だと定義している。タクシスとテンスとアスペクトの関係について、「発話時との関係」と「外的時間関係」の二つのパラメータに従い、下記のような区別を行っている。

表 1 工藤 (1995: 23) におけるテンス、アスペクト、タクシスの区別⁷⁾

	発話時との関係	外的時間関係
テンス	+	+
アスペクト	—	—
タクシス	—	+

(注: 「+」関係あり、「—」が関係なし)

表 1 からわかるように、タクシスは「発話時との関係」に必ずしも注目していない、もっぱら「外的時間関係」を表わしている。日本語においてタクシス機能を担うのはアスペクト形式と相対的テンスと時間副詞だとされているが、本稿はアイヌ語の助動詞「a」に関する議論であるので、相対テンスと時間副詞の問題には触れず、「a」が果たすタクシス機能のみを扱うことにする。

工藤 (1995) によると、タクシス機能は 3 つの下位分類がある。それぞれに継起性、同時性、後退性になっている。また、日本語の場合に文レベルのアスペクトの完成性(完結)、継続性、パーフェクト性は基本的にテキストレベルのタクシスの継起性、同時性、一時後退性と照応しているとされている (工藤 1995: 114)。なお、パーフェクトは「時間の後退性」という機能と同時に、「原因・理由の説明性」という「ノダ文」と共通するムード性とも絡み合っているとされている。

従って、過去・完了を表わすとされるアイヌ語の助動詞「a」はテキストレベルでは継起性、一時後退性を表わす可能性があると推測される。そこで、中国語の「過」に関する研究成果を引きながら、以下に検証していくことにする。

6) 工藤 (1995) は Text のことをテキストと呼んでいる。

7) 表は筆者の手によってまとめたものであり、注も筆者がつけたものである。

3. 本論

3.1 アイヌ語テキストの分類

以下、本稿で用いたテキスト資料の属性について簡単に述べる。アイヌ語は固有の文字を持たない言語である（田村 1997a: 2、佐藤 2008: 5）。従って「書き言葉のテキスト」はここでは対象とならない。その一方で、アイヌ語は数多くの口承文芸（物語文学）を持っている。本稿で主として分析の対象とした『アイヌ語音声資料 1-12』にも、uwepeker（昔話）、upaskuma（伝説）のような口承文芸のテキストが含まれる。また、ukoysoytak（会話）のテキストも含まれている。従って、細かく言えばこれら三種類のテキストが今回、分析の対象とした基礎データであることになる⁸⁾。なお、田村（1985）によれば upaskuma（伝説）と ukoysoytak（会話）の間には連続性が認められるという。

3.2 述語動詞の直後に現れる「a」が表わす機能：継起性

中国語のアスペクト形式「過」はテキストレベルにおいては継起性というタクシス機能を表わすことができる（劉 2006: 252）。

(1) 他 吃 过 飯, 洗 过 碗, 出 門 了。

3SG 食べる PFV⁹⁾ ご飯 洗う PFV 碗 出る ドア SFP

「彼はご飯を食べて、碗を洗って、ドアから出かけた。」

（筆者作例）

例文(1)は、「吃飯」（ご飯を食べる）、「洗碗」（碗を洗う）、「出門」（ドアから出かける）の三つの出来事から構成している。この三つの出来事は時間の流れの中に、次々と起こってくるという通時的な相関性があるので、「過」はその時間順的連鎖という継起性を表わすとされている。この継起性を図で表わすと、下記の図1になる。

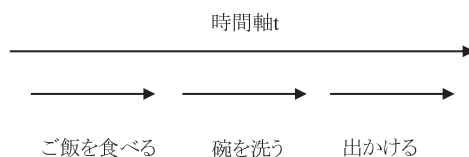


図1 例文(1)が表わす継起性

アイヌ語の「a」も中国語の「過」と同じように、図1のようなテキストに現れることがある。以下に、継起性を表わしていると考えられる「a」の例文をいくつかあげておく。

8) これらの資料が録音される時、話者はすべて60歳前後になっているが、本稿は社会言語学における性別、年齢の問題をしないので、そのような区分をしない。

9) 本稿の例文にグロスをつける際に以下の略語を用いた。

1/2/3…first person/second person/third person, INDF…indefinite, SG/PL…singular/plural,

NEG…negative, PFV…Perfective, PRF…Perfect, SFP…sentence-final particle, COP…copula。

- (2) a-hokuhu soyene¹⁰⁾ a p. arpetpa wa cip yanke
 1SG-の夫 外へ出る PRF のに 向こう岸 から 船 着ける
humi as akus ora, humihi ka isam
 音 立つ と そして の音 も ない
 「私の夫が外へ出ましたが、向う岸に舟を着ける音がしますと、
 それからは何の音もしません。」 (音声資料 6: 2¹¹⁾)
- (3) pinay ukowtur ta paye a p. nea pinay uwekari soske hine,
 谷 の間 に 行く-PL PRF のに その 谷 両方から はがれる て
 「谷の間に行きましたところ、その谷が両方からくずれて、」 (音声資料 2: 72)
- (4) hetak, tokap eci-e kuni p. tun atarimay usa pirka aep,
 さあ お昼 2SG-食べる の もの 二人 分 いろいろな 良い 食べ物
 e-se wa os e-arpa. e-arpa kuni e-epakasnu a
 2SG-背負う て の後 2SG-行く 2SG-行く の 2SG-教える PRF
 ciki kari e-arpa nankor na.
 なら そこから 2SG-行く だろう よ
 「さあ、あなたがたがお昼に食べるもの、二人分の、
 いろいろな上等な食べ物を背負って、あとから行きなさい。
 行き方を教えられたなら、そこら行くんですよ。」 (音声資料 3: 8)

例文(2)における出来事「soyene」(外へ出る)は時間的に出来事「humi as」(音が立つ)の前に発生している。「soyene」と「humi as」は時間軸において継起関係になっていると考えられる。例文(3)の出来事「paye」(行く)も出来事「soske」(はがれる)と時間順的に次々と起こっているように見える。例文(4)の出来事「epakasnu」(教える)と「arpa」(行く)も前の二つの例文と同じように、時間順的に継起的な関係を持っていると言えるだろう。例(2)(3)(4)の出来事間の時間関係は図2で表わすことができる。

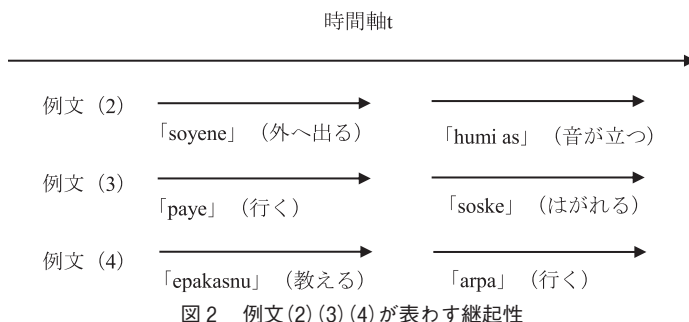
これらの例文における「a」は図2のように、「a」の前の出来事と「a」の後ろの出来事の継起的な関係、すなわち、継起性を表わすと考えることができる。

また、例文(5)のように、継起性を表わす中国語の「過」は構文上、最後の出来事につくことができない(劉 2006: 255)。

- (5) *他 吃 过 饭, 洗 过 碗, 出 过 门。
 3SG 食べる PFV ご飯 洗う PFV 碗 出る PFV ドア

10) アイス語の動詞は義務的に人称が表示される。3人称の標示がゼロ形態の接辞で表されることから、無標の動詞形式は3人称と解釈される。本稿では3人称のグロスを省略することにする。

11) 音声資料は『アイス語音声資料1-12』の省略である。「音声資料 6: 2」とは『アイス語音声資料6』の2ページとのことである。本稿で用いたアイス語例文にあるグロス、形態素の間のハイフン、省略の「…」は筆者の手によるものである。



「彼はご飯を食べて、碗を洗って、出かけた。」

(筆者作例)

例文(5)の場合、母語話者である筆者も非文だと判断する。出来事「吃饭」(ご飯を食べる)、「洗碗」(碗を洗う)までが継起性を表わすことには問題がないと考えられるが、最後の出来事「出门」(出かける)に「過」が付されると、このテキストはまだ終わっていない感じを起こさせる。すなわち、母語話者にとって、例文(5)はまだ終わっていない、次に何かが起こってくるのを予測させるものになるのであるが、テキストがここで終わっているため、不適格になると解釈できる。アイヌ語の「a」も、下記の例文のように¹²⁾、継起性を表わすので、最後の出来事につくことができないと考えられる。

- (6) ran-an wa sittemraypa-an kor, ran-an a p,
 降りる-1SG て 手探りする-1SG ながら 降りる-1SG PRF のに
 hemanta wa ka a-eokok hine, rik peka, nea eun ewonne-an
 何 にも 1SG-に引っかかる て 高い所 を あの へ 顔を洗う-1SG
 uske un, empuyna-an hine, temcaricari-an a p sekor,
 ところ へ のめり落ちる-1SG て 手をばたばたさせる-1SG PRF のに と
 ekuskonna a-sikihi makkosanpa.
 突然 1SG-の目 ぱっと開く

「下りて行って、手探りしながら、下りて行きましたが、
 何かにひっかって、高い所から、あの顔を洗う
 所へ、のめり落ちて、手をパタパタさせたときに、
 突然、目がパッと開きました」

(音声資料 2:6)

- (7) herikasino inkaran akusu, tokap ne kunak a-ramu rapok sirkunne a p,
 上の方へ 見る-1SG と 昼間 COP と 1SG-思う 途中 暗くなる PRF のに
 nis or ta, sir epitta nociw kur ka maknatara.
 空 ところに 様子 皆 星 姿 上 あかあかと明るい

12) これらの例文における接続助詞「wa」、「hine」も出来事の時間的な継起関係を表わす機能があるとすでに田村(1997a:47)によって記述されている。本稿は「a」のタクシス機能を明らかにする目的なので、これらの形式との対照を控えたい。

「上の方を見たところ、昼間だとばかり思っているうちに暗くなったのだが、
そこらじゅうに星が一面に輝いていた。」 (音声資料 1 : 46)

例文(6)にある出来事「ran」(降りる)と「temcaricari」(手をばたばたさせる)は「a」が後続して、時間的順序の継起性を表わしているが、その最後の出来事「makkosanpa」(ぱっと開く)には「a」がついていない。例文(7)も出来事「sirkunne」(暗くなる)に「a」がついているが、一連の出来事において最後の出来事に「a」が後続していない。

「a」はなぜ、最後の出来事に後続することができないのだろうか。おそらく「a」はこの場合に継起性を表わすからこそ、最後の出来事の後に立つことができないのである。つまり、継起性を表わす「a」は出来事の間の、ある結束性を示す機能を持っているので、最後の出来事のところに立つと、また次の出来事が求められるということになってしまう。次の出来事が求められると、テキストが終わらないという感じをさせることになる。

このことは田村 (1997a) の記述を想起させる。田村 (1997a) は「a」が現在からみて実際には過去のできごとだけでなく、それ以後のできごとにも問題にされているときに、この助動詞が用いられると指摘している。これは図3で表すことができる。

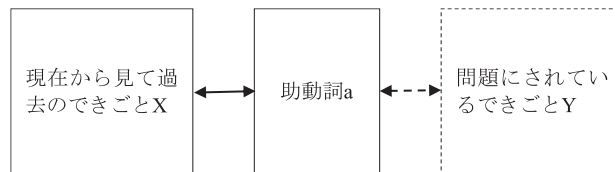


図3 田村 (1997a) による「a」の機能

図3における「できごと Y」は形式化されても、されなくても「a」が機能するときの必須要素である¹³⁾。この事実、佐藤 (2006) が指摘している「a」の平常文の文末に立たない特徴を加えれば、「a」がテキストレベルにおいて継起性を表わすことがより明確になるであろう。逆に言うと、「a」が文末に立たないのは、継起性を表わすからであるといえるだろう。

3.3 連体修飾節にある「a」が表わす機能：継起性

中国語の「過」は例文(8)のように連体修飾構造に現れる場合に先行性¹⁴⁾を表わすとされている(劉 2006 : 259)。

- (8) 老家 的 农村 已经 变成 城市 了。
 故郷 の 農村 すでに に変わる 都市 SFP
 我 曾经 住 过 的 房子 , 早 已 不 见 踪影。
 1SG 昔 住む PFV の 家 早く すでに NEG 現れる 痕跡

13) 最後の出来事が形式化されていない例文はアイヌ語の母語話者ではない筆者にとって確認が難しいので、ここで、形式化されていない場合の状況に関しては基本的に議論をしない。

14) 工藤 (1995) がいう「後退性」と同じ意味である。

「故郷の農村はすでに都市に変わった。

私は住んだ家がすでに痕跡がなくなった。」

(筆者作例)

例文(8)に「過」がついている出来事「住」(住む)は出来事「变成城市」(都市に変わる)より前に起こったことである。この例文には出来事を記述する順序と出来事が生じた順序と異なる。これは図4で表現できる。

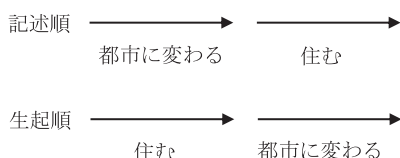


図4 例文(8)の出来事の記述順と生起順

図4からわかるように、記述の順序が変わっても、連体修飾構造における「過」がついている出来事は生起順的に、先に起こったと理解される。この場合に、「過」は先行性を表わすとされている。アイヌ語の「a」は連体修飾構造においてどのような機能を表わすだろうか。まず、連体修飾構造における「a」の例文をいくつか見ていくことにする。

- (9) hine ora a¹⁵⁾ a uske ta suy arpa hine mono a.
 そして そこに (奥様が) 座る PRF ところ に また 行く て 正座する
 「そして奥様は坐っていたところに、また戻って行って、坐りました。」 (音声資料 2 : 18)

- (10) ruwe ne akusu ora nea kiyanne a-yupi, a-se a kam ahupte-yar
 の COP と そこ あの 年上 1SG-の兄 1SG-背負う PRF 肉 入れる-させる
 「するとあの上の兄が、私の背負って来た肉を家の中に入れさせました。」
 (音声資料 6 : 18)

例文(9)の助動詞「a」は連体修飾構造に位置している。助動詞「a」は出来事「a」(座る)に後続して、その後ろの出来事「mono a」(正座する)より出来事「a」(座る)が先に起こっている。例文(10)も同じように、助動詞「a」がついている「se」(背負う)という出来事は「a」がついていない「ahupte」(入れる)より先に発生していることが文脈からわかる。すなわち、例文(9)と(10)において、「a」がついている出来事は先に叙述されている。記述の順序と出来事の生起の順序が同じであることから、「a」は連体修飾構造においても継起性を表わすことが推測できる。さらに例文を追加して検証してみよう。

- (11) Kamuyto ya ta oka rok tumunci kamuy umurek,
 カムイト 岸 に いる-PL PRF 悪い神の一つ 夫婦

15) アイヌ語では「座る」という意味の動詞は「a」であり、完了を表わす助動詞「a」と同じ語形である。

Huci-nupuri, Ekasi-nupuri, nea Ekasi-nupuri, cis kor ikesuy
 フチヌプリ エカシヌプリ その エカシヌプリ 泣く ながら 立ち去る
 「カムイト（＝摩周湖）の岸にいた鬼神の夫婦、フチヌプリとエカシヌプリ、
 そのエカシヌプリが、泣きながら怒って立ち去った。」（音声資料 1：20）

- (12) mosmano an hine, nea oharkiso un an a set or,
 (夫) 構わずに いる て その 左座 に ある PRF 寝台 ところ
 nea a-hoku osma hine oar isam.
 その 1SG-の夫 に入る て まったく ない
 「夫は黙ったまま、左座にあった寝床に、入ってしまいました。」（音声資料 2：20）

例文(11)にある「oka」（いる）は動詞「an」の複数形であり、「rok」は助動詞「a」の複数形である。例文(11)の鬼神の夫婦が「oka」（いる）という出来事は後続の「ikesuy」（立ち去る）の前に発生していて、出来事「oka」と「ikesuy」は密接な時間関係を持っていることが文脈からわかる。例文(12)にも寝台が「an」（ある）は夫が「osma」（入る）する前に発生する出来事である。出来事「an」と「osma」の間に、継起的な関係があると考えられる。例(11)(12)の出来事間の時間関係は図5で表わすことができる。図5から、「a」は先の推測通りに、連体修飾構造において継起性を表わすということが言えるだろう。

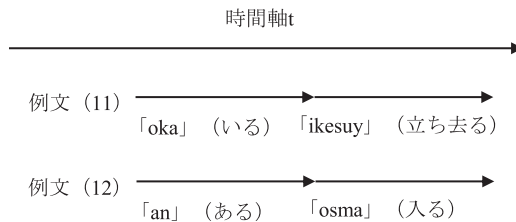


図5 例文(11)と(12)が表わす時間関係

また、アイヌ語の「a」に関して直接証拠性の機能を果たすと指摘されているが（吉川 2020）、連体修飾に現れる場合、「a」が必ずしも証拠性を表わさない例がある。

- (13) ora roruyso ka ta, Okikurmi kamuy kor katkemat
 そして 東側の床 上 に オキクルミ 神様 持つ 奥様
eymek a rika a-osura tek hine an ruwe ne.
 配る PRF 脂身 INDF-を投げる ちょっと て いる の である
 「そして東側の床の上に、オキクルミの奥様が
 配った脂肉がポイと捨ててありました。」（音声資料 6：60）

- (14) tan senpe, as, as, a, tap a-kar pe ne a noyne ka,
 この せんべい 今 INDF-作る もの COP PRF よう も

kawnukawnu, wa, pirka.

かりかりする て 良い

「このせんべい今作ったものであったみたいに

かりかりしていい。」 (アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎研究1:101)

例文(13)はオキクルミの神の奥様が肉を貧乏夫婦に配ったところ、貧乏夫婦に引っ張られて体が見られたので、オキクルミ神が怒って雷で貧乏夫婦を殺したという話である。その後、若者たちは現場に駆け付けた。この場合に、「rika aosura」(脂身が捨てられる)は若者が見えたことがわかるが、奥様が「eymek」(配る)ことは見ていないと思われる。ゆえに、この場合に「a」は直接証拠性を表わすと言えないであろう。例文(14)も同じように、話者はせんべいを作った場面を見ていないと推測されるので、直接証拠性が言えないであろう。また、例文(13)は出来事「eymek」(配る)と出来事「aosura」(捨てられる)が時間順的にやはり継起的な関係にあるので、「a」は継起性を表わすと言えるだろう。例文(14)も時間的に、出来事「kar」と出来事 kawnukawnu (かりかりする) は次々と生起するので、この場合にも「a」は継起性の機能を持つと考えられる。

以上の議論から、中国語の「過」が連体修飾構造において先行性を表わすのと異なり、アイヌ語の「a」は連体修飾構造において継起性を表わすと言ってよいであろう。

3.4 「wa an」と共起する「a」が表わす機能：継起性

「a」はアスペクト継続形式「wa an」とも共起することができる¹⁶⁾。この点において中国語の「過」とは事情が異なる。中国語の「過」はアスペクトの継続形式「着」と共起することができない。また、中国語の継続形式「着」はテキストにおいて同時性を表わすとされている(劉2006:260)。文レベルで動作パーフェクトとされる「a」と状態パーフェクト「wa an」¹⁷⁾とが共起する場合、「a」がテキストレベルで果たしている機能とは何であろうか。以下に、「a」と「wa an」とが共起する例文から見て行くことにする。

- (15) tapne, sine po a-kor wa an-an a korka,
 このように 一人 息子 1SG-持つ て いる-1SG PRF けれど
 a-poho i-y-okpare wa, siknak-an
 1SG-の息子 1SG.O-挿入音-虐待する て 目が見えない-1SG
 「かくかくしかじかで、私には一人息子がいましたが、息子が私を
 虐待して、目が見えなくなりました。」 (音声資料2:8)

- (16) neno cis-an kor hotke-an wa an-an a p
 そのように 泣く-1SG ながら 横になる-1SG て いる-1SG PRF のに

16) アイヌ語の「a」と継続形式「wa an」と共起できるということは北海道大学大学院文学院佐藤知己教授のご教示で分かったものである。

17) 「a」が動作パーフェクトを表わす、「wa an」が状態パーフェクトを表わすことについて詳しく佐藤(2006)をご参照されたい。

oro ta, a-yup-utari ekimne earki hine

そこ に 1SG-の兄-たち 山へ に来る て

「そのまま泣きながら横になっていまし たが、そこに、兄たちがやって来て、」

(音声資料 5 : 24)

例文(15)は「kor wa an」(持っている)の後ろに「a」が後続している。文脈から見ると、「kor」は出来事「okpare」(虐待)と「siknak」(目が見えなくなった)より先に発生している。例文(16)にも出来事「earki」(に来る)が「hotke」(横になる)のすぐ後に起きている。例文(15)と(16)の出来事の時間的順序は図6で表わすことができる。

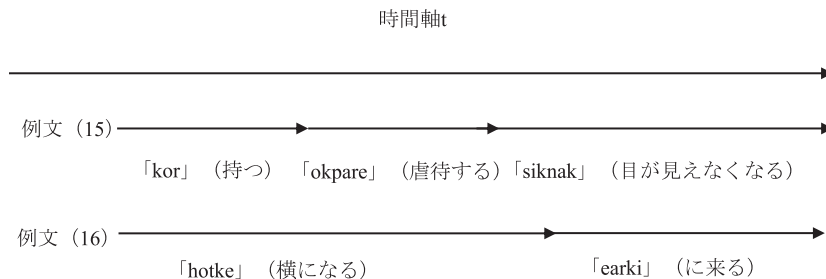


図6 例文(15)と(16)が表わす時間関係

例文(15)と(16)の出来事間の現実の時間的順序はともかく、図6に示されているように、継続的形式「wa an」と共起した場合でも、「a」は継起性のタクシスを表現し、ストーリーをどんどん先に進めていく機能を持っていると考えられる。ちなみに、「a」とは対照的に、継続的形式である「wa an」はタクシスから言えば、以下のようにストーリーの進行をいったん停止し、背景事実を説明する機能があると言える。

- (17) inkar-an akusu, mun-um ta cise ka ape ka isam uske ta
 見る-1SG と 草-の中に 家 も 火 も ない ところ に
ray-an wa an-an.
 死ぬ-1SG て いる-1SG

「気がついてみますと、草むらに家も火もないところに、
 私は死んでいました。」

(音声資料 5 : 60)

- (18) kiyanne a-yupi hoski ahun. poniwne ayupi os ahun.
 年上 1SG-の兄 先に 入る 年下 1SG-の兄 後に 入る
 iyotta iyos no ahunan. ruwe, osisoun wa,
 一番 後 で 入る-1SG の 右座 から
 rukiyanne tu menoko, usamerok wa oka.
 少し年上 二人 女 並んで座る-PL て いる-PL

「上の兄が最初に入り、下の兄がその後に入り、
 一番最後に私が入りました。右座に

少し年上のふたりの女性が並んで座っていました。」

(音声資料 6:12)

例文(17)は沼貝の神様が人間に悪いことをして死んでしまったという物語である。沼貝が死んでしまい、魂は身体から離れたが、生きている時と同じように世界を観察している、という場面である。この例文は魂が述べたものである。出来事「inkar」(気づく)より「ray wa an」(死んでいる)は先に起こっている。例文(18)にも出来事「ahun」(入る)より先に「usamerok」(並んで座る)が発生している。「wa an」が後接する出来事が時間軸から戻って記述しているように見える。例文(17)(18)にある出来事を記述順と生起順で表現すると、それぞれに図7、図8になる。

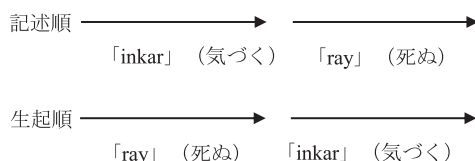


図7 例文(17)出来事の記述と生起順序

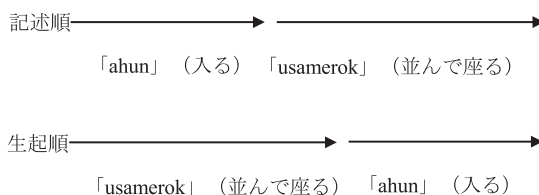


図8 例文(18)出来事の叙述と発生順序

図7と図8から明らかなように、「wa an」は一時後退性を表わすと考えられる。この点からすると、「wa an」に「a」が後続した場合は、ストーリーの停滞がそこでいったん終了し、ストーリーのさらなる進行が「a」によって促されていることが、より明確であろう。

4. 終わりに

本稿は中国語の「過」との対照的視点から、テキストレベルにおけるアイヌ語の「a」の機能を考察した。その結果をまとめると以下ようになる。

- ① 「a」はテキストレベルにおいては継起性というタクシス機能を表わす。また、中国語の「過」と同様、「a」が継起性を表わすとき、一連の出来事の最後の出来事につくことができない。すなわち、「a」はテキストの文末に立つことができない。その理由は継起性を表わす「a」が次の出来事を求めるので、「a」がテキストの文末に立つと、テキストが未完結になってしまうからである。
- ② 中国語の「過」が先行性を表わすことと異なり、連体修飾構造においても、「a」は主節の出来事との関連において継起的なタクシスを表している。なお、連体修飾構造における「a」は必ずしも証拠性を表わせない場合がある。
- ③ 「a」は継続形式「wa an」と共起する場合、テキストレベルにおいて「wa an」の文レベルの継続性が中和され、「a」が表わす継起性は表面化する。ちなみに、アスペクト形式「wa an」はテ

キストレベルにおいて一時後退性を表わす。

以上から、アイヌ語の「a」はテキストレベルで、継起性というタクシス機能を持つと考えられる。なお、本稿では紙面の都合上、継続と慣習を表わす「kor an」、モダリティ形式とされる「ruwe ne」「hawe ne」などと「a」と共起する事例の分析まで至らなかった。また、アイヌ語の「a」が平叙文の文末に立たないが、「e-teke e-pirpa a? (お前は手を洗ったか)」¹⁸⁾のように、疑問文の文末に立つ場合がある¹⁹⁾。中国語の「過」も疑問文において同じ現象が見られる。このような類似した文法現象²⁰⁾はアイヌ語と中国語において同じ理由で現れているのか、残された問題がまだまだ数多くある。引き続き、これらの問題を今後の課題にしていきたいと考えている。

参考文献

- 知里真志保 (1974/1936) 『アイヌ語法概説』 (『知里真志保著作集』 4, 1-197. 東京: 平凡社所収)
Halliday, M.A.K. & Hasan Ruqaiya (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
金田一京助 (1931) 『アイヌ叙事詩ユーカラの研究 2』 東京: 東洋文庫.
工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 東京: くろしお出版.
劉綺紋 (2006) 『中国語のアスペクトとモダリティ』 大阪: 大阪大学出版.
佐藤知己 (2006) 「アイヌ語千歳方言のアスペクトー kor an, wa an を中心として」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 12: 43-67.
佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.
佐藤知己 (2012) 『アイヌ語調査資料のデータベース化に関する基礎的研究』 1. 札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター.
田村すず子 (1984) 『アイヌ語音声資料 1』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1985) 『アイヌ語音声資料 2』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1986) 『アイヌ語音声資料 3』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1987) 『アイヌ語音声資料 4』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1988) 『アイヌ語音声資料 5』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料 6』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1991) 『アイヌ語音声資料 7』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1993) 『アイヌ語音声資料 8』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1994) 『アイヌ語音声資料 9』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.
田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京: 草風館.
田村すず子 (1997a) 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典コレクション: 日本列島の言語』 1-88. 東京: 三省堂.
田村すず子 (1997b) 『アイヌ語音声資料 10』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

18) この例文は佐藤 (2008: 254) から引用したものである。

19) この現象は北海道大学大学院文学院的佐藤知己教授および本稿の査読者の方より指摘されたものである。

20) 詳しい議論を別稿に譲るが、疑問文においてアイヌ語「a」は文末に立つが、多くの場合、「hapo ipe a ruwe? (お父さん、食事したの)」(佐藤 2008: 209) のように、疑問詞とみられる「ruwe」が後続している。中国語の「過」も同じく文末に立つが、多くの場合に「吗」という疑問詞が後続している。

田村すず子 (1998) 『アイヌ語音声資料 11』 東京：早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子 (2000) 『アイヌ語音声資料 12』 東京：早稲田大学語学教育研究所.

吉川佳見 (2020) 「アイヌ語における「完了」表現があらわす証拠性」『北方言語研究』10：203-218.

A Function of Auxiliary verb *a* in Saru Dialect of Ainu — Taxis function compared with the Chinese *guo* —

Changcheng MA

(Doctoral Course Student at Graduate School of Letters, Hokkaido University)

In terms of the auxiliary verb *a* in the Saru dialect of Ainu language, previous studies have made achievements at the sentence level, but few studies have focused on the text level. Based on previous studies, this study compares the Ainu word *a* with the Chinese *guo* from the perspective of Chinese and examines the function of *a* at the text level. Firstly, the results show that when *a* appears immediately after the predicate verb, it represents ‘sequentiality’ (successive temporal relationship) of the taxis function, which is similar to the Chinese *guo*. The *a* which represents ‘sequentiality’ has the characteristic of seeking the next event, so it cannot appear in the last event of the sentence. Secondly, in the modifying phrase, *a* still represents the ‘sequentiality’ while Chinese *guo* means the ‘anteriority’ (earlier in time). Lastly, the results reveal that *a* also represents ‘sequentiality’ when co-occurring with the continuous form *wa an*. Based on these results, this study argues that *a* represents ‘sequentiality’ at the text level. Besides, this study shows that *a* may not represent the function of ‘direct evidentiality’ when it appears in the modifying phrase, although the examples are not so many. Furthermore, this study indicates that the continuous form *wa an* shows ‘anteriority’ at the text level.

Keywords: Ainu language *a* Chinese *guo* Text Taxis function sequentiality